

R
RITSUMEIKAN

主催：立命館大学国際言語文化研究所

2013年度国際言語文化研究所 連続講座

バイリンガリズム をほりさげる

参加費・
事前申込不要

第1回

10/4

「多言語主義の過去と現在」

報告者：安田 敏朗 (一橋大学)

司会：崎山 政毅 (本学文学部)

第2回

10/11

「世界文学のなかの日系文学～言語と言語の狭間で～」

報告者：水野 真理子 (富山大学)

コメント：日比 嘉高 (名古屋大学)

司会・コメント：西 成彦 (本学先端総合学術研究科)

第3回

10/18

「バイリンガル脳を覗く：帰国生と国際結婚家庭の子供達を対象に」

報告者：田浦 秀幸 (本学言語教育情報研究科)

進行：高橋 秀寿 (本学文学部)

第4回

10/25

「文化翻訳のバイリンガリズム——複数言語のせめぎあいから」

報告者：砂野 幸稔 (熊本県立大学)

コメント：真島 一郎 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

司会：崎山 政毅 (本学文学部)

2013年
10月 4・11・18・25日 (毎週金曜日)

立命館大学・衣笠キャンパス・末川記念会館第3会議室

開場 17:00 開催 17:30～19:30

お問い合わせ先：立命館大学国際言語文化研究所 Tel：075-465-8164 E-mail：genbun@st.ritsumei.ac.jp

URL：http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/lcs_index.htm

2013年度 連続講座

「バイリンガリズムをほりさげる」

主催：立命館大学国際言語文化研究所

日時：2013年10月4・11・18・25日（金）17:30~19:30

会場：立命館大学衣笠キャンパス 末川記念会館第3会議室

はじめに

崎山政毅

バイリンガリズムをご存知でしょうか。

多くの方は、語学学校のコマーシャル・フィルムなどで、「バイリンガル」という言葉をお聞きになったことがあるはずです。「母語」である日本語のほかに、英語をみごとに操ってみせる——今や大学においても就職にさいしても、英語の到達度・能力テストが参照されるのは当然、という流れができあがっています。

しかし、なぜ二つ（あるいはそれ以上）の言語を用いることが、求められているのでしょうか。こうした言葉の現状に対して、私たち国際言語文化研究所は、「そもそも、なぜ？」の問いを投げかけてみたいと考えています。

バイリンガリズムとは、通常、個人から社会にいたる様々なレベルでの二言語（多言語）併用のことを指しますが、バイリンガリズムが生み出される状況は、その多様性をはるかに超えて複雑なものです。

戦争や植民地支配や人種差別によって、移住を強いられた人びとが生き延びるための言語習得。新天地をもとめて越境した人たちが、ホスト社会と折り合いをつけ、成功をおさめようとするさいの二言語併用。「ジブシー」と呼ばれるシンティ、ローマニ族の成員は、かつては移動（そして追放）のなかに人生を送ってきましたが、その過程でじつに多くの言葉を同時に使うようになりました。メソアメリカのマヤ系の先住民族には、旧植民者の言葉であるスペイン語だけでなく、いくつにも分かれたエスニック・グループの言葉を、そしてときには観光客向けの英語さえも日常的に使う多言語話者が多数存在します。

そして、研究課題としてもバイリンガリズムは存在しています。植民地主義・人種主義が強制した支配言語によるバイリンガリズムの歴史性。文学をはじめとする表現活動のなかでの多言語使用の問題。人類学・民族学は「対象」の人びとと向き合うことで、バイリンガリズム状況を自らのものにしなければなりません。そしてもちろん、バイリンガリズムそのものの追究も重要な課題です。

私たち国際言語文化研究所の秋季企画では、上記の問題の群れをほりさげ、バイリンガリズム研究において、あるいはバイリンガリズムをめぐる研究において、「問われているのはそもそも何なのか・何故なのか」を明らかにしていこうと思っています。